あびこの文化

発行人
美崎 大洋
我孫子市
高野山
250−23
04(7182)
0861

市原歴史博物館見学記

郷土資料センターの設置に向け活動している五団体の会員23名が6月27日、市原市の「市原歴史博物館」を見学した。

市原市

千葉県中央部の千葉地域に位置する市。人口は約26・6万人で、千葉県では柏市に次いで第6位の規模。財政力指数が高く、製造品出荷額全国第2位の日本を代表する工業都市である他、市原商圏を形成する準商業中心都市となっている。

千葉県の中央部(千葉地域)、北は県庁所在地である千葉市に接し、東京都の都心から約35－45キロメートル圏内に位置する。東京湾側の千葉港第4区に面しており、養老川の流域に位置する。南は房総丘陵に連なる山間部で市域は南北方向に長い。また、市原市の面積は千葉県の市町村では最も大きく、関東では第14位となる。千葉セクションでは、約77万年前の地層を見ることができ、更新世の前期と中期の境界を示すものとして極めて貴重であり、GSSP(国際標準模式層断面及び地点:国際的同意の下に定められた層序断面および境界の位置のこと)に内定しているほか、養老川流域田淵の地磁気逆転地層の名称で国の天然記念物にも指定されている。(ウイキペディアより)

市原にはかつての上総国の国府(国衙)があったが、その位置は未確定。すなわち想定される場所が2か所あるが、現在の所、発掘調査ではどちらか一方には確定されていない。

午前中に到着した一行は国分寺跡を見学。広い敷地の一角には巨大な塔跡の礎石が残されている。江戸時代に建てられた「仁王門」と「国分寺薬師堂」が今も残る。仁王門には「阿形像」「吽形像」が安置されている。(写真)

ここから近くの神戸(ごうど)古墳群まで移動、その中の神戸5号墳は昭和23年に発掘が行われ、東日本最古(3世紀前半造墳)ということがわかっている。

昼食後、市原歴史博物館へ。

市原歴史博物館

既存の市原市埋蔵文化財調査センターを増改築した施設で、令和4年11月に開館した。体験型施設を併設した歴史博物館である。愛称は「Museum Center(あじみゅーじあむせんたー)」。

館内の案内は最後まで館長自らが務められて恐縮した。

展示は、基本的にすべてが市原に現存する実物(本物)で、旧石器・縄文時代、彌生・古墳時代から現代まで時代順に展示されている。最初に目に飛び込んできたのは、3000年～4000年前の貝塚が含まれる地質をそっくりはぎ取っての展示だ。規模の大きさに先ず驚かされた。

市内からは古墳が1,600基発見されているという。古墳から発掘された人物埴輪、イノシシ埴輪などがほぼ修復のない完全な形で展示されている。

博物館本体の隣の建物には、発掘の体験ができる砂場が用意されており、児童らの発掘体験の場となっている。児童らは又、火起こし、勾玉造りの体験も出来、それを市民がサポーターとして活動するのだという。

ー場所の設定と既存の設備の活用についての考え方は？

「既存施設の埋蔵文化財センターと一体化することで、学芸員を一か所に集約するとともに、機能や設備の二重投資を抑制した。また隣接する旧屋内ゲートボール場を歴史体験館として利用することを考えた。」

ー博物館建設に国、県の補助金を利用したのか？

「建設には国などの補助金を利用していない。建設は市債と一般財源により行い、展示整備は文化基金の繰り入れにより行った。

また博物館の整備は地方創生推進交付金を受けてスタート。計画当初、同創生推進交付金はハード事業が対象外であったため、基本計画策定、建築・展示基本設計、建築・展示実施設計までを補助対象として、経費の半額が国庫補助、残りを文化基金から支出した。」(質問は訪問5日前に先方に送信済み)

放談くらぶ

『民藝運動』と式場隆三郎～精神科医の芸術探究～」に参加して

芦崎　敬己（会員）

去る六月二四日（土）午後二時からアビスタ第二学習室で開催された我孫子の文化を守る会の「放談くらぶ」に参加しました。

今回は、『民藝運動』と式場隆三郎～精神科医の芸術探求～」と題しての講演です。

当日は、六月下旬の梅雨の最中で、連日三〇度に迫るうっとうしい陽気でしたが、参加者は、市民・会員を含めて二八名でした。

この講演の約一年前、令和四年五月に、当会の役員と会員で「式場隆三郎と民藝運動」企画展を開催中の市川市文学ミュージアムに見学に行きました。この時は急な事業開催のためもあり一一名の参加でした。

この見学会に筆者も参加しましたが、私自身は式場の名を画家の山下清氏の支援者として聞いている程度の知識でしたから、企画展では漸く式場と民藝運動の全体的な関連を知り得た程度でした。

そのため、今回の講演で、どんな知識を深められるのか楽しみでした。講師は当会の会長美崎大洋氏で、初回講演とのことで講演の意図なども楽しみでした。

なお、この参加報告は、配布されたレジメの柱建てを基に、講演で話されたことと筆者が調べた事項を加えてまとめました。講演での内容と異なる部分もあるかと思いますが、ご容赦ください。

早速講演では、テーマ設定のきっかけについて、次の二点を上げています。

それは、まず、令和二年にアビスタで開催された「山下清展」（我孫子市市制五〇周年記念事業・二〇二一年一一月二十一日～十二月二〇日）に関しての、展覧会では、山下氏の作品や展示は当然多いのですが、式場の名前が一ヶ所を除いて殆んど出て来なかったことに、美崎氏は奇異に感じたと言っています。

更に、令和四年に白樺文学館において開催された常設テーマ「民藝運動と我孫子」（二〇二二年三月一日～九月二五日）では、柳宗悦が前面に出ているものの、ここでも式場の名前が余り目立たなかった点を指摘しています。

実際、式場は、柳とは一体で行動していて、むしろ民藝運動の実践者として式場自身が自認していたこともあり、民藝運動の真っ只中で活動していたのが、式場であったと美崎氏は力説しています。

この表に出て来ない不可思議な点が、美崎氏の今回の講演の動機とのことでした。

ここで昨年の市川市文学ミュージアムの参加報告「企画展『式場隆三郎と民藝運動』を観て」（稲葉義行氏）を我孫子の文化を守る会の会報紙一八八号（令和四年七月一日）で見ると、

平成二年に我孫子で開催された「山下清展」で山下清と深い関係があった式場隆三郎に関する説明が無かったことに民俗学の萩原法子氏が会報「あびこの文化」第一七九号で疑問を呈しておられました。

とあります。そこで今度は遡って、会報紙一七九号（令和三年一月一日）三頁「（特別寄稿）『山下清展を観て』（萩原法子氏）を見ると、

しかしすべての展示を観終わって感じたことは「山下清を発見、世に出した式場隆三郎の姿や影が全く見えないこと」だった。（中略）しかし広範な展示場の中に式場が出てきたのは、「式場先生と一緒にゴッホの墓に行った」という清の日記の一か所だけであった。

余りにも期待外れで、「なぜ？」という疑問が拭い去らなかった。

と論じられています。

ただ、ここで、山下清を見出したのは式場隆三郎自身ではないとの見方は、今回の美崎氏の講演でも言われていて、萩原氏の認識と違いがあります。しかし、萩原氏もその部分は「　」で括っているので、清の最初の発見者説については、ここでは省略します。

何れにしても萩原氏から稲葉氏、美崎氏に連なる『式場隆三郎に関わる説明や情報量等の少なさ』を指摘している系譜は見て取れます。

では、一体全体、萩原氏のいう『期待外れ』は何だったのか。美崎氏が言う『名前が出て来ない奇異、名前が目立たなかった点』ほ、何を指しているのか。

式場隆三郎の民藝運動の中での成果や精神病理学上の実績、或いはそれらが連関した功績が少なかったのでしょうか。

講演の中から考えて行きたいと思います。

場隆三郎の略歴

式場　隆三郎（しきば　りゅうざぶろう）は、一八九八（明治三一）年七月二日、新潟県中蒲原郡五泉（ごせん）町（現五泉市）で、小学校教員の父幸平、母タニの三男として生まれました。（一九六五（昭和四〇）年一一月二一日没・六七歳）

母方の叔父の麻青（ませい・本名益平）の影響で、一三歳の頃から雑誌「ホトトギス」を知り、漱石の小説を読むなど文芸の世界に憧れていたと言われます。

一九一三（大正二）年、一五歳、五泉町の医家の垣沼（かきぬま）家の養子となり移住しました。

一九一七（大正六）年、新潟医科大学（現・新潟大学医学部）に入学しました。

一九二一（大正一〇）年、垣沼家を離籍し、式場家に復籍した。学校を卒業し、精神病学の助手となる。松沢美寿子と結婚。

一九二三（大正十二）年、長女（美香子）誕生します。柳が命名しています。

精神科病院

式場が精神科を選んだ理由について、医学の中で文学や心理学に関係のある唯一の学門と語っていると美

崎氏は説明します。

一九二二(大正一一)年新潟医専の助手を経て、東京府大井町(現・品川区)に精神科医院を開業しました。一九二三年に関東大震災に遭う。一九二九年に医学博士になり、精神病理学分野で精神科医としてのキャリアを重ねてきました。

その後静岡脳病院院長を経て、一九三六(昭和一一)年、三八歳の時に千葉県市川市国府台に「国府台病院」を開院しました。その後一九四六(昭和二一)年に式場病院に改称しました。

式場は、「暗いイメージの精神科に明るさを取り入れ、より文化的で和やかな空気が感じられるように」という想いで、芸術の潤いが溢れる空間づくり、広大なバラ園の造営、近代的な病棟の建設作りを進めてきたとしています。

更に、式場病院のホームページでは、革新的な医療の根底には、式場が幼いころから心を寄せていた文学への素養、白樺派の人々や芸術家らとの交友など、医療活動以外で数多く関わった事象から得た知見や思想が横たわっていたと紹介しています。

具体的にはゴッホやロートレックら芸術家の研究・紹介、柳宗悦が主導した民芸運動への参画、山下清の教育支援、二〇〇冊に及ぶ書籍の刊行などの活動が相互に連関し合い、式場病院での医療に大きく還元されていったのです。

また、病院内に一九三九(昭和一四)年に建設された式場隆三郎家住宅(院長自宅・榴散楼)が、二〇二一(令和三)年一〇月に国の登録有形文化財に指定されました。この建物は、民藝運動の中心的メンバーである柳宗悦と濱田庄司が設計、河井寛次郎が現場監理を担い、建てられたものです。朝鮮張りの床、箱階段、洋風暖炉等を用いて、洋風・和風・東洋風の要素を取り込んだ「民藝の意匠」が色濃く顕れた「民藝建築」の代表作と言われています。

そしてこの建物の名称が、「隆三郎」から捩ったのは、誰もが分かるでしょう。

更に、余談ですが、式場は柳に対して、病院の第二候補地として我孫子を考えていたと言う構想もあった様でした。

柳宗悦と式場

(1)白樺派:一九一七(大正六)年、医専に入学したこの頃から雑誌「白樺」を愛読し始めます。

一九二〇(大正九)年、学生時代に友人の吉田璋也(よしだしょうや)と共に新潟から我孫子の柳 宗悦邸(現・三樹荘)に遊びに来て、その晩に泊まりました。

二人が初めて柳に会って泊まったことに、美崎氏は驚きを隠せなかったようでした。新潟から来て迷ったせいなのでしょうかと言っています。しかし、筆者は、柳が式場や吉田と白樺派文学や民藝運動に関して、余程意見が通じ合い、夜を徹しての話になったのではないかと想像しています。

なお、吉田璋也は、鳥取県出身の医師で、式場の大学時代の同級生。民藝運動家です。民藝運動が提唱する生活道具を扱う「たくみ工芸店」を一九三二年(昭和七)に鳥取で、翌年東京・銀座で開店しています。

一九二〇(大正九)年、この頃から「白樺派」の作家や柳宗悦など民藝運動に関わる人たち、バーナード・リーチ等の作家たちと親交を深めました。また、ゴッホに心惹かれたのもこの頃と言われています。

式場は、「柳は生涯にわたり私の芸術に関する恩師」と言い、文芸や芸術創造活動と人の精神的な問題とのかかわりに関心を持ち、柳の「朝鮮民族美術館(京城)の創設」に参加したり、オペラ歌手である柳兼子(夫人)の音楽会の開催に協力したりして深い関係を築きました

(2)木喰仏(もくじきぶつ):(特定の宗派に属さない遊行僧(ゆぎょうそう)の木喰(一七一八年~一八一〇年)が日本中を旅して、訪れた先で一木造の仏像を彫刻して奉納した仏像。伝統的な仏像彫刻と異なる作風で、荒削りな円空(一六三二年~一六九五年)による円空仏とも異なる。木喰五行上人、木喰明満上人などとも称する。

木喰仏は、にっこりと笑う表情の仏像(微笑仏)である。全国に一〇〇〇体もの多くの遺品が残る江戸時代後期の仏教行者・仏像彫刻家である。

一九二四(大正一三)年一月、浅川巧の誘いで甲州を訪れた柳は、木喰仏三体を発見し、その後全国調査で三五〇体以上を発見しました。柳は、木喰仏の研究は単に偶然ではなく、運命的なものであると言っています。一つは「真の美の認識の直感」、美しいとは何かということです。二つは「民衆的な作品に心を惹かれていた」、三つは「宗教への興味」が研究に導いたからだとしています。

一九二五(大正一四)年、柳の木喰仏の研究に式場は協力します。式場の医療活動は休止状態となりますが、木喰仏の研究では、その後の民藝運動に繋がる萌芽となりました。式場の言葉に、『私はもう(木喰)上人を離れて生きて行けなくなった。私は、上人の心の中に弱い私を守る。これからの私の運命がどう変わろうとも、上人は私の前にいて下さるだろう、私は信じ、私は進む』と木喰上人に惚れ込んでしまい大袈裟に言い放っています。

(3)民藝運動:「民藝」とは、一九二六(大正一四)年に柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎によって作られた新しい美の概念であり、「一般の民衆が使う日常の生活道具の中に『美術』とは異なる手仕事の美しさを発見し、それを通して生活や社会を豊かなものに作り変えていこうとした。」運動です。

何も、美しいものは、全て民芸品であるとか、民芸品でないと美しくないと言っているのではなく、自由で健康な美が最も民芸品に表れていると言う事実を見定め、そう言った美しさこそ美の本流であると言うのである。実用の使われている物の中に美しさがあると言うのである。

また「図録 式場隆三郎と民藝運動」では、「民藝とは、『人々の暮らしの中にある生活道具を民衆的工藝(民藝)と名付け、そこに健全な美が多く宿るとし、その美を生活に生かすことを目指して活動する』(山田真理子編・著)としています。日常使用している物に

こそ本来の美しさ「用の美」があるとしています。

(4) 式場の「民藝運動」への本格参入：

一九二六(大正一五)年四月、柳、濱田、河井、並びに陶芸家の富本憲吉の四名の連名で日本民藝美術館設立趣意書を発表し、民藝運動がスタートしました。式場は、木喰仏の仕事に没頭した結果、研究心を刺激され、その結果精神医学研究に専心する決意を固め新潟医科大学で指導を受けることになりました。

一九二八年(昭和三)、「小学児童の知能基準並びに劣等児の精神病学的研究」等の学位論文を執筆し、精神医療の分野でも研究を進めました。

一九三一(昭和六)年に柳は、民藝運動の機関紙として雑誌『工藝』を刊行し、八年遅れて式場は『月間民藝』(後に『民藝』と改題)を創刊しました。

精神科医と芸術

(1) ゴッホ：(フィンセント・ヴィレム・ファン・ゴッホ・一八五三年～一八九〇年、オランダのポスト印象派の画家、ホッホ、コッホとも表記する)ポール・ゴーギャンと共同生活を始めたゴッホは、九週間で二人の関係が悪化しました。一八八二年一二月に口論の末に家を出たゴーギャンに憤慨したゴッホは、剃刀で自らの左耳を切り落とす奇行を行い、精神の異常を起こして、その後間もなく自ら拳銃で自殺しました。

こうしたゴッホに対して式場は、精神科医として感じるものがあり、一九二〇(大正九)年以降、ゴッホに心惹かれ、複製画を収集し、一九三〇(昭和五)年以降は、本格的なゴッホ研究を始めました。最も正確な伝記を書きたいと考えた式場は、精神病者が描く絵画を芸術病理学の観点から研究するスタンスで『ヴァン・ゴッホの生涯と精神病』を一九三二(昭和七)年に著わしました。

戦後になり、一九五一(昭和二六)年銀座松坂屋でゴッホ展を開催しました。

(2) 山下清：一九二二(大正一一)年～一九七一年(昭和四六・今日年四九歳)、画家、ちぎり絵(貼絵)作家、東京市浅草区(現・台東区日本堤)生まれ、一歳の時に関東大震災に遭い新潟県に移住、三歳の時に風邪により命の危険に陥り言語障害・知的障害を患う。四歳の時に父が死亡し、後に母は再婚。

養父は、酒飲みで、酒が入ると母子に暴力を振るった。小学校で虐められたことを話す清に、養父が「刃物で相手を怪我させろ」と唆したことで、虐めに遭った際に鉛筆削り用の小さなナイフで同級生にケガをさせたことがある。そのため学校にいられなくなりました。

しかし、このことを山下清の展覧会主催者側の人は、決して話すことはないと美崎氏は語っています。

母は子供三人を連れて粗暴な夫から北千住に逃れ、一九三四年(昭和九・一二歳)、杉並区の母子家庭の社会福祉施設「隣保館」へ転居し、母の旧姓山下を名乗った。その年の春、清は、千葉県東葛郡八幡町(現市川市八幡)の救護施設「八幡学園」(現知的障害者施設八幡学園)に預けられ、八幡学園で「ちぎり絵細工」に出合いました。

一九三六(昭和一一)年に学園の顧問医の式場隆三郎の目に留まりました。実際、式場自身が清を見出したのではなく、顧問医を務める学園の児童であったことで後に知ったのが実情だと言います。

一九三七(昭和十二)年、江戸時代の日本画家伊藤若冲の「群鶏図」を見て、清は同じものを貼り絵で作って、その絵を式場が見て『貼り絵の大作である』とその巧みさや速さに驚いたと言われています。

(3) 草間彌生：一九二九年(昭和四)生まれ・九四歳、長野県松本市出身、京都市立銅駝美術工芸高等学校(現・京都市立美術工芸学校)絵画科卒業。

草間彌生のいくつかの作品は、水玉模様や網目模様などの同一のモチーフの反復で絵画の画面や彫刻の表面を覆うことが特徴の一つである。少女時代から統合失調症(医学博士西丸四方が診断)を病み、繰り返し襲う幻覚や幻聴から逃れるために、幻覚や幻聴を描きとめる絵を描き始める。一〇歳頃からすでに水玉と網目模様をモチーフとしていた。

一九五二年(昭和二七)、地元の松本市公民館(旧松本市公会堂)で初めての個展を開く。精神科医の西丸四方が立ち寄り、感銘し、絵を購入しました。関東精神神経医学学会で紹介するほか、知人である精神科医式場隆三郎が、東京日本橋の白木屋百貨店などのつてを紹介し縁を得る。

草間も式場が自ら見出した人ではありません。展覧会に出した三〇〇〇点に及ぶ作品を式場が見て、その作品数だけではなく、一つ一つの作品が皆活き活きとしていて、他人の影響を受けていないことが理解できる個性的な作品で、その異才を認め後援しました。

(4) 二笑亭：一九二六(昭和元)年、東京深川門前仲町に「二笑亭」(にしょうてい)という世にも奇怪な建物を地主の渡辺金蔵(一八七七年～一九四二年)が建てた個人住宅です。

渡辺は関東大震災後、徐々に神経に変調をきたして、症状のすすむにまかせ、十余年の間、自由な資力で建築を行いました。迷路のような複雑な建物だったと言います。

この建築を記録した一九三九(昭和一四)年刊行の奇書に、すでに失われた「二笑亭」とその主の謎をめぐる大胆な追跡調査報告を加え、出版したのが「二笑亭奇譚」です。この著作は、初版以降もそれぞれ異なる出版社から度々復刊され、二〇二〇年二月には七回目の装丁で刊行されました。

まとめとして

今回の講演にあたり、美崎氏は、『民藝』や『二笑亭奇譚』など個人として蒐集した書籍を持参し、放談くらぶ参加者が具体的に理解し易いように展示しました。今では入手できない雑誌や書籍もあり、休憩時間は勿論、講演が終了しても多

くの人が参考文献に見入っていました。

講演の最後に美崎氏は、「我孫子と式場隆三郎をもっとPRすべきではないか」と言って締め括りました。表に出て華々しく活躍する人の影にいて、その人を支え・支援する人にもっとスポットを当て、広めて行くべきだと願う美崎氏の気持ちに私も共感しました。

最後に

講演の冒頭で、今回のタイトルについて美崎氏は、通常なら「民藝運動と式場隆三郎」のメインタイトルに、それを補足する意味でサブタイトルを付けるものですが、「～精神科医の芸術探究～」のサブタイトルは、メインタイトルの様でもあり、二つのタイトルを並行したことに少しおかしいかも知れないが、この言い様しか無いと話されました。

私は、今回の放談くらぶでの講演が、大きくは『民藝運動』『式場隆三郎』『精神科医』『芸術探求』の四要素を包含しているので、正にタイトルはこれしかなかったのであろうと思います。仮に「民藝運動における式場隆三郎の精神科医としての芸術探求」と一行のタイトルにしてしまっては、些か長過ぎると思う。

そして、冒頭で問題提起した萩原氏のいう『期待外れ』は何だったのか。美崎氏が言う『名前が出て来ない奇異、名前が目立たなかった点』は、何を指しているのかについて、明確な答えは出なかった。

式場隆三郎が、かつて柳の三樹荘を訪問しただけでなく、我孫子と直接的な関係がもっとあれば違ってきたかもしれないが、今更時間は取り戻せない。

ならば、地元の歴史や文化に対する理解度を高め、今後関心度を高揚させる私たちの活動が、求められているのかも知れない。

＊　この感想文の執筆にあたり、経歴等はウィキペディア、また当会の会報誌「あびこの文化」一七九号「(特別寄稿)『山下清展を観て』(萩原法子氏)、及び『図録　式場隆三郎と民藝運動』(山田真理子著・二〇二二年)を参考にしました。

放談くらぶ講演会

『明治天皇我孫子宿泊―女化原演習 天覧行幸記』を聴講して

牧田（まきた）　宏恭（ひろゆき）（会員）

1　はじめに

今までの観測記録上、類を見ない猛烈な暑さに見舞われている、8月19日(土)表記の当会「放談くらぶ」が20名の参加を得て「アビスタ」にて開催された。講師は当会顧問(前副会長)の越岡禮子氏である(**写真1**)。

明治天皇はかなり意欲的に国内各所を視察されたようで、講師のお話にはなかったが、Wikipedia「明治天皇聖蹟」によれば、天皇が行幸で訪れた「場所」や「建物」のうち377件が国によって「史跡名勝天然記念物保存法」により「聖蹟」に指定されたが、1943(昭和23)年に国の指定遺跡が解除された。

「聖蹟」とは主に行在所:あんざい所、御小休止所などを指している。「我孫子」の地名は、当時の377か所の指定に表示が無かった模様であるが、千葉県に11か所、近くは「松戸」「柏」が「行在所」として記されていたようだ。

本日の演題は、今もあまり知られていない「明治天皇が我孫子にご宿泊された」事実を語る内容である。

2　行幸概要

要旨は、前号の「あびこの文化:194号」の「あびこだより」に講師の寄稿文があるので併読されたい。明治天皇が我孫子に行幸された記述は、1930(昭和5)年　千葉県発行の「千葉県明治天皇遺蹟」の中にある「明治17(1984)年茨城県女化原(おなばけはら)における陸軍近衛砲兵隊のドイツ流動的射撃訓練の天覧演習視察」に赴く道程について記された中にあるとのこと。内容は63頁に亘り、詳しく触れられているとのこと。これは大変貴重な書物で、「千葉県中央図書館」「木更津図書館」および「角松旅館」に所蔵の3冊のみだそうで、越岡氏は主要部分のコピーを入手とのことである。

明治17年12月6日・午前8時35分赤坂仮皇居出発(皇室、近衛兵など200人を伴って)→新宿:にいじゆく(亀有付近)小休止→江戸川(御座船にて渡川)→松戸(羽生唯八宅「相模屋」にて昼食、「戸定邸」にて徳川昭武公奉伺有り)→小金:梅澤治右衛門宅小休止(煎餅を味わう)→柏村(寺島雄太郎宅)小休止→午後3時50分我孫子行在所(村越半次郎宅「松島屋」)到着、宿泊。

我孫子・村越家到着後、我孫子における天皇の行動の様子は、村越家はじめ地元の者、更に印旛郡・宗嶋新五郎らからの数々の献上があり、近在者も御嘉納の光栄を得たとのこと。なお、村越家はその後事情により所有の「松島屋」を秋元家に引き渡し「現・角松旅館」となっている。

なお、余談だが、我孫子の「行在所」として、なぜ旧「本陣:小熊家」を使用しなかったのか?という疑問についても、諸事情が越岡氏によって語られた。

翌12月7日午前8時30分、寒空の下、我孫子の行在所出発→柴崎・青山地区→大利根の渡し→利根川・中洲で農民の農作業天覧(農民が大歓迎)→利根川を渡川→取手(中村常七家)→藤代(飯田主作家)にて小休止→午前11時55分牛久村(飯島治左衛門宅)到着・宿泊。

翌12月8日天皇は体調不良のため、午後になって牛久村行在所を出発、乗馬でなく馬車にて視察先の女化原演習所(現在:牛久シャトーがある地域)へ→途中「女化神社祠官・青木又宅」小休止→女化原、近衛砲兵射的演習所→大隊長捧銃の礼受礼→午後2時ドイツ・クルップ砲(計12門)射撃天覧(夜間演習は二品宮殿下が代覧)→女化神社小休止→午後4時30分行在所帰着。

翌12月9日午後5時30分。恙ナク皇居ニ還幸』との連絡が千葉県入った由。牛久の行在所を出た時刻や、その後皇居にご帰還される中途の模様は不詳。こうして当時の宮内省より『女化原ニ於テ近衛大砲操練天覧トシテ行幸ノ御内沙汰有之』と千葉県に連絡が入り、始まった「行幸」は終了した。

3　我孫子の行幸史蹟の諸説など

講演当日には、前出の「村越家」の村越邦雄氏が会場に来られており、現在の「角松旅館」についての興味深いお話も出た。

文政のころ「加藤栄助」所有の土地が、村越家に渡り旅籠「松島屋」を営み、さらに「秋元家」に渡って「角松旅館」に代わっていった経緯などの話も交わされた。講演者の越岡氏は、村越家の前当主・村越孝夫氏に以前訊いた「行在所」についての話はあまり詳しくなく、また「角松旅館」の秋元夫人に、「行在所」当時に存在していた「玉座」の有った往時の建屋は 1981（昭和 56）年に建て替えされており、夫人から嫁いで来た 1967（昭和 42）年にすでに無かったとのお話を聞いたことなどを、「我孫子宿：明治 11 年ころ」の街の地図をもとに説明された（**図 1**）。

添付写真は、現在の「角松旅館」（**写真 2**）、明治天皇が「我孫子行在所」滞在中に使用された、「御膳水」を汲んだ、飯泉秀右衛門宅の井戸（現存物は作り直されたもの）（**写真 3**）。その他、玉座の例（我孫子ではない例）（**写真 4**）、「行在所：松島屋」に有った宮内省下賜の印（**写真 5**）など。

そのほか、印象に残った話として「明治天皇」が利根川を渡る際に乗った「新造した舟」の船頭（6 人）が「虫」という字の書かれた「編み笠」を被っていた（畏れ多くもという気持ちの表れ？）という事があった。

4「明治天皇行在所の碑」ほか

松戸、小金、柏、牛久など「行在所」の有った場所には今も立派な「明治天皇行在所」と記された碑が残されている。（**写真 6**）は松戸・羽生家行在所跡に、（**写真 7**）は小金・梅澤家行在所跡として建立された石碑。しかし我孫子には無い、何故なのか定かではない。前述のように、当時の「松島屋」は「村越家」から事情により「秋元家」に渡るなどがあって、その最中に失われたのか、もともと建てられなかったのかも含め解っていないとのことであった。

写真4

写真3

写真2

写真7

写真6

写真5

なお、「**行幸**」の他「**巡行**」の行事もあるが、詳細は割愛された。

本日の内容は、普段話題になることが少なく興味を以て受講できた。

なお、添付の（図 1）並びに（写真 2、3、4、5）は当日のレジュメ・回覧写真からコピー、（写真 1）は会場当日、（写真 6，7）は、以前当会の行事「歴史文学散歩：越岡氏がガイド（2015 年）」参加時に筆者が撮影したものを使用した。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（連載第4回）

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その2

加藤充子氏が語る、聚文画室（旧桜丘原田京平宅）の紫陽花のこと》

平林　清江（会員）

（3）明確になった原田夫妻作庭の構成とその意図

伸ぶるがまゝにまかせたりける庭の樹々
　夏日さへぎり蔭ふかぶかし

伸び伸びて枝さしかはす樹の蔭に
　今年はじめて苔の生えにけり

黒土に苔むしそめて我がさ庭
　さらに親しきものとなりたり

これらは、原田京平の遺歌集「雲の流れ」所収の短歌三首で、聚文画室の庭のたたずまいを詠んでいるが、京平・睦夫妻が自身の庭を得て、夫妻の好む木々や花々を思う存分植えては、楽しみ、又、絵画創作の題材としたことが想像されるが、その構成の輪郭がいまひとつ明確に伝わってこなかった。

今回、加藤充子氏の手紙によって、夫妻の庭のおぼろげな印象がより明確な像を結び、ひとつひとつ木々の種類と輪郭と、色彩までを鮮明にした上で、庭の全体図（像）を展開させてくださったのである。それ故、歳月を越えて庭を構成した原田夫妻の意図が明確に蘇り、伝わってくることになったのである。

かつて彼が、写生の旅から帰ると先ず庭に出て、「大きくなったな」といって、自ら植ゑかへたり伐ったりした樹々が美しい花を咲かせている、椿も、蘇芳も、うす色の木瓜も

　原田睦による「雲の流れ」あとがき

二、原田睦の絵画について

この項では、原田睦の絵画作品の「評価」及び「本質」についての論評二点を紹介し、睦の絵画とは何かということにふれてみたい。典拠は「原田　睦八十八歳自選画集」である。なお、睦の作品は、末尾に掲載させていただいたので、ご覧下さい。（前号に掲載：編集者註）

〈原田　睦さんの絵〉今泉篤男（注5）

「原田睦さんは、女流画家の中では最長老の一人ではないかと思いますが、その作品を見ると、微塵もお年寄りなどという感じがしません。非常に瑞々しい感じがします。それは原田さんが、絵を描くという自分の行動の原点とでもいうか、つまり初心をいつまでも見失っていない珍しい画家だからでありましょう。原田睦さんの絵から私は、朴にして優、優にして雅、雅にして純、というような感銘をうけます。七十五歳にしてなお童女のようなまなざしを失わない原田睦さんのお仕事を、私は羨ましい気持ちで見ています。」

（一九七三年の個展に際して頂いた原稿より）

〈原田　睦の造型〉須田剋太（注6）

差異存在の同時同時

「道元の言葉の中に『同時を知るとき、自他一如なり』という論理があります。他人と出会った時、其の人の肌の持つ何となく好きになれる自他不二―無心にああ此の人は、私を理解してくれているなと言う感動なのです。原田睦さんを初めて見たのは、確か熊谷九寿（注7）の紹介だったと思いますが、言うならば此の人の絵は、丁度丸木位里さんの母親のスマさんの絵の如く、また出口王仁三郎氏の母親出口直（ナオヒ）の書の如く、天衣無縫で―同時に私の実体とも重複してくるのです。（中略）睦さんの絵には、西洋近代造型の型式様式を、かいていても、其の奥に、東洋の持つ精神の物質化と言う、精神の悩み悲しみ、あわれさ矛盾そのものをふくんだ、哀愁が出ているのですね。此が私の持つ実体と重なってくるのです。（中略）「夜の呼吸」（右下・上）、「月と広告塔」（右下・下）は大変好きです。

此の頃の作品を不図、私は、私の作品じゃないか？と思った事があります。其れが、同時同時なのです。此は、或る作品を見た時、不図そんな、イメージが起きたら此は其の本質的実体において差異存在の同時同時です。（中略）　円と四角は造型の根幹です。直線、曲線、面、立体、色、色面、建築マチエール、オブジェ―画家は凡ての人間の生活も精神も此を、文学的説明で、表現するのでなく、造型的表現しかないのです。其処に描かれた、油絵具、紙、墨、カンバス―或る物質をかりて来て、俺は此だ！と差し出したものが作品です。絵画です。使用するものは、直線であり、垂直線か、曲線か、円か四角か―マチエール、色味―其れしか道が無いのです。

後は、此の造型化する、根源―原点其れは、人一人一人の持つ精神―差異存在実存しかありません。

此は、人は誰でも持っていて、ピカソはピカソ、ゴッホはゴッホ。原田睦は原田睦で、他と比較するものでない。芸術は闘争（政治）でない。権力でない。只一人しかない、此の生まれ出て来た一度しかない差異違いの存在をこそ大切にすべきなのです。」

〔注釈〕

（注5）今泉篤男（いまいずみ　あつお）：明治三十五年七月七日～昭和五十九年一月十九日　美術評論家。昭和二年東京大学美学科を卒業し、欧州に留学。帰国後、国際文化振興会に勤務、のち国立近代美術館次長、京都国立近代美術館館長。

(注6)須田剋太(すだ　こくた)：明治三九(一九〇六)年五・一～平成二(一九九〇)年七・一四　埼玉県、洋画家、国画会。本名須田勝三郎。独学で絵を学ぶ。昭和一〇年光風会展に初入選。昭和一三年新文展に入選、のち文展、日展に特選三回。一五年光風会会員。一六年関西に移り、戦中は東大寺に寄寓して仏像などを描く。二四年からは国画会会員となり抽象画に没頭、三二年のサンパウロ・ビエンナーレでは日本代表となる。のち再び具象画に戻り、代表作に「時間と空間」「同時併存」、著書に「私の造型」「私の曼荼羅」などがある。また四六年より司馬遼太郎の「街道をゆく」の挿絵も担当した。
「美術家人名事典　古今・日本の物故画家3500人」(二〇〇九年二月二五日　日外アソシエーツ(株)編集発行)

(注7)熊谷九寿(くまがい　きゅうじゅ)：明治四一(一九〇八)年十二・二～平成五(一九九三)年七・三十一　洋画家。大分県。本名久寿夫。関西学院卒。渡仏後、梅原龍三郎に師事。昭和十七年国画会に同人として参加、二十五年型生派美術協会を創立し、会員となる。日本の風土に根ざした油彩表現に力をそそいだ。作品に「月梅」「醍醐の桜」など。
「中津デジタル美術館」他から

「私は自分は具象を描き乍ら抽象作家に興味を持ち、厚意をよせた事を不思議に思う人も有った事と思うが一線と色を主体とする抽象は絵画の原点であると思ったからである。しかし、人となりと教養の深さと高さが、その作品の価値を決めるものである事を知らねばならない。ある年の国画会の審査の折り、嫋々とした情緒を持った太陽のある作品が目に焼き付いた。若い閨秀作家の作品らしい魅力が溢れていた。次の年もその作家は美妙な雰囲気を持った作品を出品していた。具象味を持ちそれでいて自然と融合した作品であった。隣にいた会員に聞いたら、工芸部の原田麻那さんのお母さんの作品と聞いて、その若々しさに驚かされた」

〈原田　睦さんの画集出版によせて〉

あとがき

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その1　どこに住んだのか、どのような暮らしがあったのか》をご覧になった原田喬氏から、筆者あてにメール(二〇二〇年一月二十八日)をいただいた。その中に、次のようなお言葉がありました。

「昨夜は下仁田町への原稿に追われ四苦八苦しているところでした。平林さんからのメールが入り、慌ててプリントしました。もう、本当にビックリ、新発見もいっぱいで、嬉しいやら驚くやら、感激で溢れています。

京平や睦の世界を、そのまま引き継いでくださっている加藤様にも感謝申しあげます。私たち以上に京平・睦の後継者と言えるでしょう。一刻も早く、世田谷を訪れて御礼を申し上げたく思いますが、現在は私が沢山の課題に追われていますので、暖かくなる春を待ちたいと思います。

小田急沿線には、若い頃の思い出があります。梅ヶ丘には高校時代の友人宅があり、何度か訪れました。向ケ丘遊園の先の丘の中腹の学生寮では浪人時代に半年過ごしました。世田谷が妙に懐かしいのは、京平の導きでしょう。」

また、加藤充子氏は、桜丘の聚文画室の庭の構成について、ご多忙のさなかにもかかわらず、筆者のレポートの参考になるよう、詳細なお手紙をお送りくださった。貴重な資料であり、素敵で魅力的な内容であった。このお手紙の内容を核として、何が書けるだろうか思案、その結果が《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その2　加藤充子氏が語る、聚文画室(旧桜丘原田京平宅)の紫陽花のこと》となったのである。

書き終えて、再び、例の雲に乗せられてしまった、と思ったことであった。しかし、気分は、武蔵野台地を吹く風のようにさわやかである。まこと、世田谷区民の方々は乗せ上手である。自然に手を差し伸べてくださるのである。ご自身も他者とかかわり、何かを生み出すことの楽しさを十分ご存じだからであろうか。

現在、日本のみならず、世界中の現実社会はコロナ禍のまっただ中で、充子氏の手紙にも書かれてあるように「これは戦争」、未知の見えないビールスとの戦争である。

昨年十月に初めて、充子氏とお会いしてからいまだ、再会が叶わないでいる。いったい、再会はいつのことになるであろうか。

それでも、今回、お手紙を交わすことでまとめることができた、《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その2　加藤充子氏が語る、聚文画室(旧桜丘原田京平宅)の紫陽花のこと》は、御専門が経済学という充子氏と、そして、異なる分野の筆者とのコラボレーションであるといえよう。また、これも須田剋太がその論評の中で述べているところの、「差異存在の同時同時」なのかも知れないなどと、勝手な解釈をして、楽しんでいるのである。

そうした意味において、このレポートは、加藤充子氏をはじめ、かかわってくださった方々と、筆者との共同作業の成果なのである。筆者は本当に人に恵まれている、とまたもや実感できた次第である。

皆様には心からのお礼を申し上げ、さらにご健康と安全とを祈念いたしております。**(次号に続く)**

あなたはこの偶然を信じられますか？

8月18日、坪内園子さん、平林清江さんと私が我孫子で再会した。2018年5月に初めて会ってから約5年が経過した。竹内さんは嘉納治五郎の曾孫、平林さんは当会の会員である。この3人は嘉納治五郎像建立計画前のタイミングで全く不思議な縁で知り合った。2018年は計画自体まだ案の段階で数人しか知らない時期である。治五郎が昭和13年に亡くなって以後、別荘地がどのような使われ方をしたのか、ご遺族が住まわれたとして誰がいつ頃まで居住していたのかは全く不明であった。そこに忽然と曾孫の竹内さんが現われた(平林さんの仲介あり)のである。勿論、この時、竹内さん、平林さんは建立計画を知らない。この出会いが1年前でも1年後でも全く意味がないのである。何か神がかり的な偶然とでも言うしかない。「それぞれが何か目に見えない大きな力に動かされた」また「治五郎翁の魂が呼び寄せた」のかも知れない。今もって全く不思議である。
詳しくは『我孫子の文化四十年の歩み』『もう一つの嘉納治五郎先生顕彰活動」(平林清江)を御覧ください。(美崎)

下総国相馬郡日秀の平将門再考

海津　にいな

一・千葉氏と房総平氏、平将門との関係性

平将門との関連でよく知られるのは、東京都では大手町の首塚(都指定文化財)や神田明神の御祭神であること、「青梅」という地名の由来が将門ゆかりなどだろう。

一方、茨城県は将門公の本拠地だというようなチラシを作成するなど観光政策に顕著な取り組みが見られる。将門が藤原秀郷に射られて落命した場所は、石井(いわい・現・坂東市、前岩井市)の地であったとされる。坂東市合併(岩井市と猿島町)は平成一七年で、新市合併の際の命名理由は坂東太郎の利根川沿線という共通認識にあったということである。郷土館ミューズの広報活動として将門研究者・村上春樹氏の編集で『坂東市将門記』を刊行した他、将門マラソン、時代行列を行う将門祭りなどを開催して将門のまちとしてのPRに大変力を入れている。そこで、歴史、文化財としての情報がどの程度整理されているか、検索をしてみると茨城県公式ホームページでは二一四件の事項が出てくる。将門の正室・君の御前を祀る后神社は現・桜川市に、そして現・坂東市には国王神社があり、かつては后神社と対になる形式であったとされる。律令制下の常陸国真壁郡であったあたりに、君の御前の父・平真樹の館があったと伝えられている。

現在の行政区分に当てはめて見てみると、平将門の活躍の地としての伝承が多い下総国相馬郡はほぼ現在の千葉県に当たるが、千葉県庁ホームページでは、四九件と大差である。天慶の乱(将門の乱)の始まりにおいて、正室・君の御前と子も殺害された経緯から、将門が場所替えしたという推察はできる。関東八か国を征したのは数か月であって、常陸国、下野国の従兄・平貞盛および遠戚関係・俵藤太(藤原秀郷)の度重なる挑発、包囲網によって将門の首は取られたのであった。残党も厳しく追う手が迫り、関係する村々は焼き討ちにあった。痕跡を消そうとしたのは道理である。敗者が声高に語ることはしない。

平将門の乱関係図

埼玉県・幸手市は平将門の首塚が残り、市指定文化財史跡となっている。高さ三メートルほどの石組みの五輪塔がある。古代は下総国猿島郡(万治年間以降所属替えにより武蔵国葛飾郡)に属していた幸手は日光御成道及び奥州街道の江戸・日本橋から各六番目の宿場町として知られた。

では、大手町の将門塚と呼び習わされてきた場所はどうであろうか。百年前の九月、関東大震災で壊滅状態の大手町で発掘調査がされていた。五世紀の古墳塚のものだったとの新聞報道がされていた。江戸時代までは屋敷を賜った大名が管理した。酒井藩邸の庭であった時期に御手洗池と呼ばれた一角にこんもりした塚があった図が描かれ、明治政府に代わって、大蔵省の管轄となった際の写真も残っている。戦後は、GHQ米占領軍)の駐車場にするという時に因縁めいた事故が起き、祟りだと騒がれた。その後、塚の土地を譲り受けた東京都に対し、将門塚保存会の申請(一九七一)があり、都指定文化財の通知がされた。都教委の調べでは塚と将門伝承以外に確たるものは見いだせず、京から首が飛んできた話ではない。[1]

平将門の子孫を語る際の盲点は次女の春姫が、平忠頼(将門の叔父・良文の三男)の正室であった点だ。良文は、天慶の乱に関わっていなかった為、将門の所領を受け継いだとされる。乱に関わった兄弟、家臣には追補の手が厳しく命果てたが、春姫から多くの分流(相馬氏など)を出し、大同族を形成した。春姫の長男の忠常は千葉氏の祖と言われ、次男の将恒は秩父氏(秩父平氏)の祖となり、三男の頼尊の子孫は 中村氏を称し各地の大族となった。

三女も大変美しかったが、地蔵菩薩に深く専心し、結婚を求められても断り続けて、如蔵尼として齢八十余りで没した。将門討伐後、如蔵尼は奥州に逃れた後に、龍光院(柏市)にて一族を弔い、その際に納めたとする地蔵菩薩像が残っている。また、姉と共に父・将門が亡くなった岩井(現坂東市)の地に国王神社を建て、供養のため自刻の像を納めた。福島県相馬市中村、同小高の国王神社にも祀ったと伝わる。その他に、福島県いわき市の恵日寺には如蔵尼のものと伝わる地蔵菩薩像があったとされる(戦禍失)。守谷市にある海禅寺のご本尊・延命地蔵菩薩は神亀十五年の行基の作とされ、寺の縁起によると如蔵尼の持仏として静かに供養されてきた。茨城に北相馬、千葉に南相馬、福島の相馬に将門ゆかりが多くあるのは周知のとおりだ。

千葉に居拠した一族は鎌倉幕府成立に大きく関わっていた。頼朝が挙兵の一一八〇年、房総の両平氏が歴史に名を遺した。源頼朝の形勢不利を救ったのが、房総平氏を継ぐ一派である 千葉の介・常胤であった。この辺りの話が大河ドラマ『鎌倉殿の十三人』で放映され、坂東武者の一族が頼朝、義経らの援軍になって加わり、貞盛の子孫・清盛の栄華が終焉するのを見た。石橋山の負け戦で、頼朝は安房に逃げ延びた。続く結城浜の戦いで、藤原親政が千田荘に攻め入った時、金原・粟飯原・原の諸氏は親政に従った。常胤は頼朝に味方し、一族を率いてこれを迎え撃ち、その孫・成胤が親政を捕えた。親政は平家総帥である平清盛の姉婿

であった。この後、常胤は頼朝の「義父」として遇され、頼朝の後見人的存在として位置づけられた。

房総平氏の勢力図を書き直す戦は更に続いた。結城浜の戦いを制した常胤に遅れはしたが、上総の介・広常が加わると、坂東の武士はこぞって頼朝軍に合流、その後、富士川の戦いにて平家に味方した兄の常茂を討ち果たし、多数を率いた広常が名実と共に房総平氏の当主となる。常胤とは又従兄弟にあたる。

安房上陸、上総、下総を経て東国における頼朝の軍事力は平家方の勢力を大きく上回るようになり、いよいよ鎌倉を目指した。しかし、上総の介・広常の豪胆な振る舞いや、その軍事力が脅威的であったために、頼朝に謀反の疑いを掛けられ誅殺されて、房総平氏の惣領の地位は千葉常胤に移ることになる。後に広常の無実が晴らされ、その弟たちも放免されたが、千葉常胤の配下となる事を余儀なくされた。藤原親政に服属した金原・粟飯原・原の諸氏も千葉氏の家臣となり、千葉氏が房総平氏の当主となっていく。現在の千葉市辺りに居拠し、千葉氏を名した常重を開府の祖として九百年にあたる二〇二六年を記念する事業に取り組んだのが熊谷前市長(現知事)の時である。

他方、常陸国にあった平国香の息子であり、将門とは従兄であった貞盛は、将門の討伐の功によって貴族に叙せられ、京に上り、その末裔から平清盛を輩出する平家一門を誇るようになる。房総平氏にとっては苦渋が晴らされるまでの二百五十年に及ぶ長い戦いだったのだ。

一一八二年には、北条政子が男子(後の頼家)を産んだことで、千葉常胤の「義父」としての関係は、「御家人」の一人として扱われるようになった。政子の実家である北条氏や乳母の家である比企氏をその支持基盤の中軸に移すようになっていく。頼朝と直接的な血縁・婚姻関係にない房総平氏は鎌倉政権の中枢から外されていった。

源頼朝が幕府を開き、軍力を預かる征夷大将軍として帝を奉る武家政権(幕府)を創始した。頼朝は「大将軍」の称号を望み、朝廷は征夷大将軍を任じた。以降六七五年間にわたり、武士の棟梁として事実上の日本の最高権力者である征夷大将軍を長とする幕府体制が敷かれ、鎌倉・室町・江戸幕府が勃興し、一時的な空白を挟みながらも朝廷は権威としてあり続けることになる。歴史の表舞台に名を馳せた千葉氏であったが、その後の小田原征伐(一五九〇)において、上総、下総(千葉氏)の両総平氏の歴史は幕を引く。

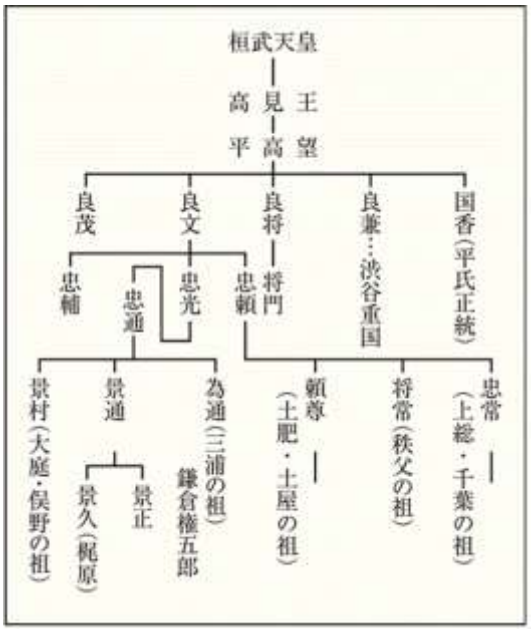
二、新たな歴史認識「記憶の場」

神田明神の辺り、武蔵国豊島郡芝崎村(現千代田区)で嘉元年間に疫病が流行し、将門の祟りではないかと恐れる村人が供養を行った。その後(一三〇九)には神田明神の相殿神となった。江戸に幕府を開いた徳川家康は、三河武士を伴い江戸に入城する時に、将門への崇敬を示し、将門の霊力によって城の四方を固め、江戸の人々の人心掌握をしようとした。それが庶民文化興隆に繋がった。坂東の英雄・将門は歌舞伎、浮世絵の恰好の題材になった。その後、明治新政府は王政復古の大号令のもと、江戸城を天皇の住まう皇居とした。天皇行幸の明治七年に、神田明神に立ち寄ることになった際に、朝敵となった将門を祀るのを改めよとの要請がされ、構内の摂社に遷座した。

戦後も遷されたままであったが、大事はなかった。大河ドラマ『風と雲と虹と』で、人気俳優・加藤剛が将門を演じると現在の聖地巡礼のようなブームになり、岩井市(現・坂東市)などに観光客が大挙、我孫子市にも観光バスがやって来てたのだという。将門人気が全国的な広まりになって、放映から八年後の昭和五九(一九八四)年に、平将門命は三ノ宮御祭神として神田明神本殿に奉祀復帰した。摂社への遷座から百十年後であった。

越岡禮子氏より資料提供

海外の歴史研究者の中には、将門の時代を研究する学者も現われた。『ファースト・サムライ 平将門』(英文)を著した米教授のカール・フライデー氏は、平将門は関東八国を掌握したが朝敵との誤解を解くべく、朝廷の中枢にいた旧主君・藤原忠平(摂政)に書状をあてていたことを重視した。



将門も、貞盛も、桓武皇孫の家系にあった者として平姓を賜った。その孫の代も貞盛の孫と緊張関係にあり、「忠常の乱」とみなされるが、出家して反乱の意が無い事を示したにも拘わらず、その意図は伝わらなかった。将門はさらし首刑の最初の見せしめとなる不名誉極まりない扱いで、朝廷は権力を見せつけた。将門、忠常を朝廷の反逆者として成敗、その後は、平貞盛の末裔である清盛が帝と娘の縁組で栄を極めていった。

海外の研究者の中には強力な軍事力を掌握する幕府の将軍となっても、政権奪取に至らなかった武家政権について、不思議にも感じるようだが、昨今は国内の学者から将門の乱、忠常の乱は武士団の体制に影響

をもたらしたとの指摘がある。

平将門とその一族の伝承は関東を中心に全国に広がっていた。特に怨霊となった形で江戸の頃は歌舞伎、音曲、絵画にと姿を現し、現代においてもSF映画、サスペンスドラマに取り上げられたりしている。日本三大怨霊と言われる中でも、筆頭に挙げられるからだ。皇居近くの一等地・大手町のビルの谷間にある首塚は、月や火星にも人類を送り込もうという時代にパワースポットとされている。そして、我孫子市日秀には「将門さま(明神様)」が将門神社として、密やかに存在する。

近年、仏歴史学のP・ノラは「記憶の場」を大切にすることを提唱している。権力者によって書かれ残された歴史から見落とされた人々の記憶が残るものを見直すことの重要性を指摘した。我孫子の市史研究の重鎮・西嶋定生氏(故人、東大名誉教授、東洋古代史)は、我孫子市史編さん委員として執筆もされたのが将門の時代であり、当地に残る将門伝承の意義を無視してはならないと書いている[2]。神田明神の祭神として祀った平将門を、東国武者の祖であるとして崇敬した始まりは、徳川家康である。一方、我孫子の将門神社の創建は、将門が手賀沼周辺を闊歩していた少年の頃から、遅くても落命直後であったろうと伝承等から考えられているので、江戸の以前である。

我孫子市史・資料編には『将門記』を全文掲載のために二段組十三頁に亘って、ひらがな、カタカナのない和漢文を全文提示している。その全文を読もうと挑戦する者が果たして何人いるだろうかと筆者は当初は少々驚いた。他の漢字文献では要点の部分を抽出するに留めているものが多いからだ。全文掲載の『将門記』を読み、我孫子の将門伝承から誘発される歴史のヒントを見逃さないで研究を深めて欲しいとの編集者の意図を感じるのであるが、どうだろうか。

『史遊』2号に特別寄稿された山路直充氏の『将門記』王城の地 下総国の亭南について」には、西嶋定生教授への学恩に報じたいとも書いてあった。これまでに山路氏が積み重ねてこられた地域研究を基に寄稿しておられるので、詳細で示唆に富んだ内容だ。山路氏は寄稿の中で、西嶋氏は押しも押されもせぬ東洋考古学の権威として多くの成果を残された方であり、その学恩に多くの研究者が連なり、切磋琢磨研鑽していると記した。

そこで、改めて『将門記』の成り立ちを考えてみたい。巻物本で全長一一六四・九センチの体裁の漢字写本として残っていたもので、最初の部分が欠落していた。漢文読解の返点が付され、傍訓、切点、声点を頼りに読み下していく様式である。この古写本『将門記』は、名古屋市(当時の美濃国大須村)の真福寺に伝わっていたものだ。それを傍証する資料は残されていない。世に知られる写本には、真福寺本ともう一つの重文指定となっている楊守敬本がある。因みに、古写本は国宝指定重要文化財であり、現在の研究者は写本から複製された印刷本を利用する。

将門ゆかりの多い守谷では、市に移行する以前の昭和六〇年に『町史』が編纂され、その中で山崎謙二[3]のことばを引用して、「将門記を記した人は、将門にゆかりのあった大木の僧侶で、この人が守谷の大木山連乗院に入山して、そこで書いたものであろう。本来ならば、将門が開山したといわれる筒戸の禅福寺で書きたかったのであるが、そこでは書けない事情があった。禅福寺は最初は真福寺といっていたが、将門敗死の後一度廃寺となり、その後名前を変えて、禅福寺と称して復興した。」との一説が述べてある[4]。

大木の僧侶であっても禅福寺で『将門記』は書くことはできず、将門七人の影武者の死屍が葬ってある御霊山と称する大木山で書いたと、守谷町史に記されていた。美濃の真福寺と守谷筒戸の真福寺(現在の禅福寺)とは、何等かの関連性も考えられるので、今後の研究に期待するところである。

我孫子市の歴史、古墳調査には西嶋教授も関わって、むしろ多くの人は住宅開発の度に目の前に広がる発掘調査に興味が向いて、地域の歴史への関心も盛んであったと思われる。もちろん、放射性炭素年代測定を利用するような時代ではなかったから、郡衙遺跡から炭化米が出ても年代特定するまでもなかった。その測定で年代が将門の一〇世紀も含まれることが早くから分かっていたら、研究の方向性も違っていたであろう。我孫子市内で最古の由緒があるとされる龍泉寺は、将門の乱の時期に消失、その後に再建したという[5]。

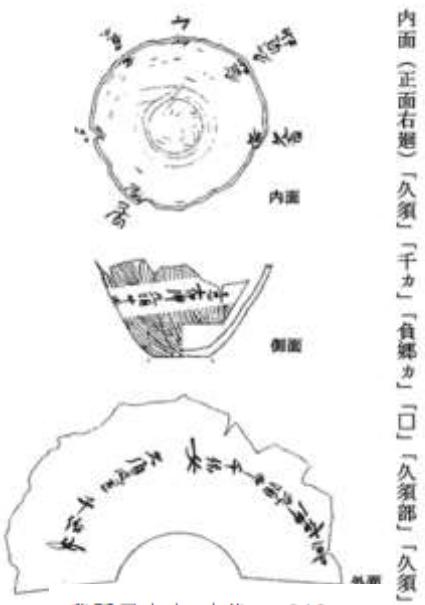
三、将門神社と隣接する相馬郡衙

相馬郡衙正倉跡(日秀西遺跡)は、県指定文化財である為、千葉県のホームページに紹介があり、今のところ九世紀半ばまでの遺跡と書いてある。これをそのまま受け取れば、将門が闊歩した時代には律令政庁として機能していなかったとなる。その後、我孫子での現地調査は進み、十世紀頃までの複合遺跡と明確にされた。看板に説明が記され、さらに西大作遺跡の調査報告(二〇〇三)も出て、この周辺が古代道・意布駅との関係付けもされると、日秀から新木地区は広範囲な複合遺跡であったと考えられそうだ。千葉県にも報告できているはずだが、古代の遺跡調査について県ホームページは更新がされていないのは残念である。

将門神社は相馬郡衙正倉跡の看板設置場所から徒歩数分である。付近の神社氏子には増田姓の方が多く、そうした地元の方に教えられた幾つかの貴重な情報があった。古代道(現かまくら道)が郡衙史跡敷地の中を通っていたという事、神社の参道というべき道が郡衙の方向へ繋がっていた、日秀地区の住宅建設で夥しい数の瀬戸物がでてきた、氏子は二十数軒だけで続いてきた、将門の井戸は首洗い井戸と呼んでいた、前から家紋として揚羽紋を掲げていた、オビシャの際の矢は将門調伏祈願をした成田山へ向けて射る、米屋の羊羹は食べないのだ等、折々に話して頂いた。また、観音寺住職には、寺の縁起に関する古文書、将門の持仏との謂れの四センチ程の仏像を拝見させて頂いたが、この品々を傍証する物がないとも言われた。今もこの地区の人々は静かに篤く将門さまを信奉しておられると感じさせる言葉だった。

現在の支援学校(旧湖北高校)と将門神社の間は畑が広がるので神社に続いていたとは分からなかった。西嶋教授が我孫子市史編纂事業に取り組んでいた時期

には平将門と郡衙遺跡を関係づけて観る発想の下地はなかった。次の図は新木遺跡から出土の藤原部(久須波良部)との関連を示す土器の一部である。



我孫子市史 古代　p342

朝廷との強い繋がりのあるかなり広域の古代の郡衙であったということは、平将門が律令制に従属するのでなく、新しい機構を作ろうとの想いを巡らした場所であった可能性はありそうだ。我孫子における将門研究者・戸田七支氏は、『将門記』に「王城を下総国の亭南に建つべし。兼て橡橋(うきはし)を以て号して京の山崎と為、相馬の郡大井の津を以て京の大津と為む。」とあるのに着目、将門が我孫子に在留した理由に下総相馬に設けられた郡衙への至近性、手賀の海への利便性、敵方となって命を狙い続ける親族から距離をあけられる点をあげた。

戸田氏は自身が我孫子市布佐に住まうことから、坂東市での先行研究『坂東市本将門記』を重んじながら、先行研究にとらわれることなく、我孫子での言い伝えや相馬郡衙と将門神社の位置関係に着目した。それまでおこなわれてきた古代常陸国の岩井や下総国の北部ではなく、視点を南下して、将門の時代に手賀海という内海の広がりのあった我孫子(日秀)、手賀沼沿いを研究対象に地域の調査を続けてこられた。

平安時代に立ち戻る調査は、地形も、地名すらも変化が生じて同一ではないため、それらを踏まえて時代の限界を超えなくてはならない難しさがある。では、戸田氏はこれまでの研究とは違う研究方法をどのようにされたのであろうか。まず、『将門記』を何度も読んで、そこに記される「王城の地」を探るため、手賀沼周辺の踏破調査を行った。自宅のある布佐から日秀に向かう手賀沼沿いの国道356号の崖線などを何度も往復した。特に、高台にある日秀の将門神社からの景観に注目していったのだという。

また、戸田氏の家からそう遠くない位置に頼朝の松(布佐)、巴塚(印西)があったことから、奈良平安の古代道の往来以降も鎌倉幕府開闢への痕跡に気づいて、大いに調査の励みとした。将門が常陸国の叔父たち、従兄、親族たちから度重なる襲撃を受け、幼き日に馴染みがあった相馬郡の我孫子に移ってきたとのインスピレーションを得て、文献だけによらず踏査を重ねたのだという。『将門記』では「女論」として語られる女性と土地にまつわる親族内での戦にもこれまでの研究者とは違う解釈を示した。

平安時代は妻問婚が通常で、しかし、正室・君の御前は殺害され、後に首謀者の叔父・良兼の娘を奪っての略奪婚であった。子が生まれた娘は、一旦は連れ戻されるが、弟たちの手配で将門のもとに逃げ帰った。親族の領土から距離を置いた地を探すとなると、馴染みがあった日秀の辺りは高台であり、砦としても好ましい所であった。戸田氏は日秀で幼少期を過ごしたとの将門伝承を軽んじず、現在は学校、公民館などになっている公用地周辺に暮らした可能性が濃厚であろうとの仮説を立てた経緯を説明した。

日秀の高台に居した眼下の先に、王城を目論んで果たせなかった大井の津の柏の方向が見える。合わせて、寵姫・車御前(柏市大井)と愛妾・小宰相(印西竹袋)へも距離的には同じくらいにある。兵糧が得られ、高台であることは砦としての機能も備え、水路、陸路も活動しやすく、水辺には豊かな食物を得やすい。生活用水は簡単に手に入る場所であるから、何度か足を運ぶうちに筆者も将門が居たに違いないと納得してきた。

坂東市が研究を重ねた営所などの戦闘拠点については、営所は闘いの先端部であり、ゆえに将門が亡くなった場所となった終焉の地であることは認めても、妻が親元に連れ戻されるような実家に近い暮らし方はしなかったであろう。よって戦乱が始まって以降、将門の生活本拠地が一か所のみと断定出来たわけでもない。

戸田氏の主張では、二月の農繁期は戦をしないとの不文律であり、将門は伴類を村に返した。老獪な秀郷の戦略に従い、貞盛、良正らは、将門陣営の手薄の間隙を狙って、秀郷たちのいる方へと誘い出した。将門が援軍を呼び寄せにくい場所と時機を選んで戦いに春の嵐が加わり、矢が将門のこめかみを貫いて落命したと戸田氏は最期の戦場面を解釈する。

NHK作成班は、ロケ地の選定もあって、大河ドラマの準備に我孫子までも関係するお宅を取材していた。ロケ地は、誘致に熱心な岩井市や結城市などにて行う流れになっていた。

戸田氏の強みは、過去に将門が愛馬で通った如く愛車を駆動し、先行研究で定説化されてきた場所だけに囚われずに広範囲に踏査を行う事である。地元近隣の歴史への関心から何度も同じ道を繰り返して走り調査を続けてきた点にある。運転技術と土地勘が伴わなければ、草を掻き分けていくような細道でのドライブは出来ないだろう。戸田説によって、我孫子湖北(日秀)と平将門についての新たな視点をもたらす地域研究、観光研究がすすめられる好機になるよう期待するのである。

（注釈）

1 都教育委員会文化課・鈴木氏に確認(令和五年六月二八日)

2 『我孫子市史・古代』三七六頁

3 日本における弁証法論理学の先駆的研究者。平将門についての論評も多い

4『守谷町史』九三–九四頁
5『湖北村誌』一七四頁

（参考文献）

1『将門記（しょうもんき）』冒頭部分が欠落している写本（二種とも国宝指定。原本不明）が、平将門の一代記として第一級史料。欠損部分を補う史料として『将門略記』が参考にされる。
2『真福寺本楊守敬本将門記新解』村上春樹（歴史研究者）『将門記』底本二本は和化漢文で、その読み下し注釈書。
3『将門と忠常　千葉氏のルーツを探る』千葉市立郷土博物館
4『ちば見聞録　房総の将門伝説』千葉県立中央博物館榎美香主席上席研究員がテレビ番組で将門創建の日秀観音寺、神社及び井戸を案内しながら解説。現在はインターネット動画で視聴可能
5 The first samurai: the life and legend of the warrior rebel Taira Masakado　Karl Friday
6『平将門』大岡昇平（1965）歴史小説
7『我孫子市史・古代』及び『資料編』　西嶋定生・他

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

・美手連報告

「美しい手賀沼を愛する市民の連合会：略称（美手連）」関連報告　（第5報）

牧田　宏恭（ひろゆき）（会員）

「あびこの文化」前号（194号：7月1日発行に詳細掲載済み）において、「**手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物等について**」と題し、私が問題提起したこの内容の詳細について、去る5月末に当会がメンバーになっている「美手連」を通じて千葉県の行政組織である「**千葉県柏土木事務所**」に出向き、事務所幹部に、この問題提起文を提出、説明し、解決策などについて、初めての意見交換の会議を持ったことを報告させていただいた。（**写真1，2，3**）

「美手連」としてはこのほか、「千葉県柏土木事務所」との懸案事項に「**手賀沼におけるウエイクボード（モーターボート等に取り付けられたロープに掴まり、ボード上に乗った人を牽引して走行する行為）の排除**」について、「**手賀沼公園地先のアダプト（千葉県河川海岸アダプトプログラムの一環として掲示されている外来生物のナガエツルノゲイトウなどの駆除活動の掲示）の内容について刷新**」を共有している。「ウエイクボード」は以前より目につく行為だが、エンジン音を轟かせ、すさまじい水しぶきと波を掻き立て、水路の狭い手賀沼を無神経にドライブ？している。（**写真4**）

なお、「美手連」の活動についての報告は、第1報「あびこの文化」第190号に、第2報「あびこの文化」第191号、第3報「あびこの文化」193号に、前報（第4報）を「あびこの文化」第194号に掲載。活動報告第5報を「あびこの文化」第195号（本号）掲載とさせていただいた。

写真1

写真3

写真4

写真2

美手連では、上記の問題を含め、この2か月（7，8月）、主に次のテーマに取り組み推進中である。

1．手賀沼流域協働調査（令和5年度河川水質調査：湖北水路2か所）

7月5日（水）「**湖北水路水質調査**」が岡発戸、都部谷津において、11名：我孫子市手賀沼課、谷津ミュージアム関係者、美手連メンバー参加のもと実施された。（**写真5**）

調査項目：水透視度、におい、水温、pH値はその場で、そのほかCOD、硝酸性窒素、などの残りの項目は採取水の分析などにより10項目測定した。

2．手賀沼の水の残留農薬分析

7月20日（木）、去る5月19日に続いて残留農薬の分析に必要な採水を実施。沼周囲の5地点にて採水。採水は美手連のメンバー並びに我孫子市手賀沼課職員が参加している。調査の対象として、水に含まれる「グリホサート残留分析、ネオニコチノイド系農薬高感度分析」を実施。結果の解析中。結果を手賀沼流域フォーラム実行委員会に報告し、その場で行政実行委員にコメントを求めることに成っている。必要な対策は、行政の仕事としての施策を講じてもらう必要がある。

3．都部谷津（いちぶやつ）における特定外来生物（植物）観察実施

7月24日（月）、毎月一回「谷津ミュージアム」と近辺で右記の観察を行い、「ナガエツルノゲイトウ」はじめ植

写真5

物の地区別生育・分布と、実施中の「遮光シートによる生育抑制効果」を調査。この行事には、毎回、千葉県生物学会の先生、千葉県中央博物館の先生、岡発戸・都部の谷津を愛する会のメンバー、美手連のメンバーが参加。

(写真6)

4. 豊かな手賀沼を目指すデジタル教材づくり事業の継続

「あびこの文化」第193号にも取り上げたが、前年度完成7作品に続いて、当会は「仮題：我孫子の文化人たち」で、本年度作品の制作に着手。また、美手連事務局によって制作の実践講習会も行うなど進行中である。併せて、我孫子市、柏市に続いて流山市の関係者などと、学校現場へ普及活動が進められている。

5. 手賀沼流域フォーラム活動「ライトアップで夜の虫を探そう」

8月13日(日)夜、五本松公園にて、参加者56名を得て実施。講師3名(うち1名：美手連会員・岡発戸都部の谷津を愛する会長)。56名の内訳は一般42名の他、スタッフ11名(我孫子市2名：手賀沼課長他、柏・鎌ヶ谷・白井・印西の各市から1名、美手連5名。講師3名。悪天候の中で貴重な体験会であった。

6. 手賀沼・高野山新田地区に増設中の「植生帯」について

「千葉県柏土木事務所」発注により、工事期間(5月24日頃～10月10日頃まで)と掲示、実質7月末日ころ着工し、先日の8月24日(木)まで続けられた工事は、同地区に既設の「植生帯A、B、C、D、E、F」6か所の東側(滝下広場西側：約150～200ｍ付近に増設されるもので、写真にあるような、長く、緩やかに湾曲した長細い「へちま」のような奇妙な形状をしている。

写真6

(写真7、8)

現在、既設の「植生帯」には低木、ヨシ、マコモなどの他、ナガエツルノゲイトウ、オオバナミズキンバイなどの外来水生植物も入り込んで繁茂しているのが目視できるが、「植生帯」の説明板(**写真9**)に、書かれている以前(平成20～24年ころ)存在が確認され、年々増え続けているとの記載がある「ヒメガマ」に代わり「マコモ」の増殖が現在見られるものの、当時確認されていた数十種の植物が。現在存在しているのかは目視で分からない。**困った問題は「植生帯」の周りを囲む「水路」のほとんどを、「ナガエツルノゲイトウ」「オオバナミズキンバイ」が、異常に繁茂し、水路の大半を覆いつくすほどになっていることだ(写真10)。これによりわずかに残る水路の水面に濁りの有る澱みが発生している。この状況の中、さらに「植生帯」を増設したことは、理解に苦しむ。**既設の「植生帯」が目論見通りの効果をあげているか？の分析・評価をして、問題あれば対策を講じ、必要ならば増設を検討する姿勢が求められる。

写真10

写真7

写真8

写真9

7. その他

去る、8月10日(木)、「外来植物の農業に与える影響」について、取材を進めている「読売新聞東京本社」の調査研究本部の記者が、美手連の活動内容に興味を持ち、取材の申し込みを受け、対応したとの報告が事務局からあった。「高野山新田付近」の「ナガエツルノゲイトウ」の繁茂を見て、その群落の大きさに驚いたそうだ。

以上

あびこだより108号

「日常の言葉と数の豆知識」

太田　功

この度皆様にお話しさせて頂く太田と申します。

東京の江東区にある中学校で数学の教師として約40年近く勤務して来ました。今回この機会を紹介していただいた芦崎敬己君は、その当時の教え子の一人です。

退職して20年以上経過しました。

お話しするのは、10月半ばになりますが、生活している日常において身のまわりにある数字やことばについてです。

例えば日常使用している用紙、A版とB版は何がどのように違うのでしょう。三角形があると3つの角度の和は180度です。どうして180度などと半端な数なのでしょうか。

今年の「えと」はと聞かれると、うさぎと答えます。

・・・

間違ってはいないでしょう。しかし厳密に言えばだめで

す。「えと」とは「干支」と書きます。十干、十二支のことです。うさぎは、十二支です。では今年は十干では、……。そもそも十干をほとんどの人がご存じないのが現状でしょう。これは細かく説明いたします。これを知らずして還暦の祝いなどできません。その他日常無意識に使用している数や言葉について紹介いたします。最後のこれらについて全部ご承知の方には申し訳ありません。ご容赦の程を。

また、そんなことを知ったからどうしたなどと思わず、知らないより知っている方がと願い、一緒に考え学習しましょう。

（（講師紹介）

講師：太田　功（おおた　いさお）

略歴：元江東区立砂町中学校校長

昭和38年に東京都江東区立砂町中学校の教員になる。数学の講師として38年間同区内の中学校に勤務。

最後に、はじめに着任した砂町中学校の校長を務めて、平成13年3月に退職。

著書：『太田先生のちょっと豆知識』（株式会社　日冠、2022年7月）

「放談くらぶ」で太田功氏が講演

日時　10月15日(日)14時～16時

会場　我孫子市民プラザ会議室1

演題　『日常の言葉と数の豆知識』

（詳細は前記）

～～～～～～～～～～～～～～～

（プロジェクト報告）百人一首を楽しむ会（番外）

美崎　大洋

今月の歌（恋の歌その24）

うかりける　人を初瀬（はつせ）の　山おろしよ

はげしかれとは　祈らぬものを　（74）

【現代語訳】

（私に冷淡で）つれないあの人が、私を想ってくれるようにと初瀬の観音様にお祈りをしたのに。まさか初瀬の山おろしよ、お前のように、「より激しく冷淡になれ」とは祈らなかったのに。

【語句】

【うかりける　人を】「うかり」は形容詞「憂し」の連用形に過去の助動詞「けり」の連体形がついたもの。「初瀬」は現在の奈良県櫻井市にあり、長谷寺がある。【はげしかれとは】は「もっと激しくなれ」と呼びかけた言い方。

【作者】

源俊頼朝臣（みなもとのとしよりあそん。1055～1129）百人一首の71番に選ばれている大納言経信（つねのぶ）の3男。10歳代より一時期修理大夫・橘俊綱の猶子となる。篳篥に優れ、雅楽の「ひちりき」を得意とした。嘉保二年（1095年）に父・経信が大宰権帥に任ぜられたため、父ともに大宰府へ下向するが、承徳元年（1097年）経信の死去に伴い帰京する。その後は、堀河院歌壇の中心人物として活躍し、多くの歌合に作者・判者として参加するとともに、『堀河院百首』を企画・推進した。右近衛少将・左京権大夫などを歴任し、長治二年（1105年）に従四位上・木工頭に叙任、天仁三年（1110年）越前介を兼任。天永二年（1111年）以後散位。天治元年（1124年）、白河法皇の命により『金葉和歌集』を撰集。藤原基俊とともに当時の歌壇の中心的存在であった。歌風としては、革新的な歌を詠むことで知られた。

勅撰和歌集、『金葉和歌集』『千載和歌集』に多数入集している。和歌は非常に技巧的でしかも情感があり、藤原定家が絶賛している。その作風は、後世までとても大きな影響を与えた。

この歌は、藤原定家の祖父、藤原俊忠（としただ）の屋敷で詠んだ題詠の一首。相手と恋仲になりたいと思っても、相手は冷たい態度で振り向いてくれない。そこで長谷寺に祈ったものの相手はますます冷たくなるばかりと嘆いたもの。

関連狂歌

とし頼はさむさも強し山おろし

　はげしかれとはいのらぬものを

　俊頼に「年寄」を掛けた。「さむさも強し」は、「年寄の身には寒さがこたえる」ということ。

うかりける人は初瀬の山だちよ

　はがしませとは参らぬものを

評判ははげしかれとて顔見世に

　みな手をうつの山おろしかな

「手をうつ」と「宇津の山」を掛けている。静岡市駿河区丸子（まりこ）と藤枝市岡部町との境にある山。宇津ノ谷峠がある。（歌枕）「駿河なる宇津の山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり

歌枕（うたまくら）とは、古くは和歌において使われた言葉や詠まれた題材、またはそれらを集めて記した書籍のことを意味したが、現在はもっぱらそれらの中の、和歌の題材とされた日本の名所旧跡のことをさしていう。

（参考文献）

淡光ムック　百人一首入門　有吉保・神作光一　監修（淡光社）

インターネット百人一首各種投稿文

四十二回短歌の会（最終採択の一首）
七月二十五日実施

若き日の夫の勇姿目に浮かぶ
　波を蹴立てて走るヨットに
　　村上　智雅子

水害につぶれし家を眺むれば
　わが不満など何ほどのもの
　　納見　美恵子

ありふれたわが来し方に憂いなし
　馬籠の宿場に山百合の咲く
　　佐々木　侑

土砂降りにただ一人きり高齢者
　帰る術なく近隣センター
　　芦崎　敬己

やさしさとうしろめたさは裏表
　わが本心を見透かされるや
　　美崎　大洋

ほたるぶくろの花びらの中に蛍秘め
　むかし童女のあそびたりしと
　　伊奈野　道子

移り住む菩提寺囲む山に向き
　いつか吾家の古里となる
　　大島　光子

当会の行事予定

□ 第140回史跡文学散歩について
「治五郎の誕生日にゆかりの地を巡る」

日時　10月28日(土)9時我孫子駅南口バス停集合
講師　美崎大洋氏(当会会長)
コース　我孫子駅―旧小熊家―大光寺―三樹荘―嘉納治五郎別荘跡(銅像)―楚人冠記念館―白樺文学館―旧村川別荘―子の神
　(約3時間)
参加費　会員　無料　非会員　500円(30名)
申し込み美崎までTEL080-3410-4426

□ 手賀沼流域フォーラム
「川めぐりと木下の史跡散歩」

日時　10月10日(火)11時15分～15時30分
　雨天の場合10月17日に延期
場所　印西市立中央公民館集合
内容　遊覧船で手賀川下流を周遊、木下の史跡を探訪
定員　20名(抽選)
費用　1,400円(船でお弁当を食べます)
申し込み　9月22日(金)必着ではがきに住所・氏名・年齢・電話番号を記入し(2人まで)
　〒270―1143天王台3の32の6佐藤やす子まで
　電話090(8081)9139

□「放談くらぶ」

日時　10月15日(日)14時～16時
会場　あびこ市民プラザ会護室1
講師　太田功氏
演題『日常の言葉と数の豆知識』
参加費、会員無料、非会員三〇〇円
申し込みTEL(7185)0675　佐々木まで
(14ページ「あびこだより」参照ください)

□ プロジェクト「短歌の会」

第四十三回短歌の会
日時　9月26日(火)13時30分～
場所　けやきプラザ10階小会議室

◎見学ができます(080-3410-4426(美崎)

我孫子市のイベントなどの予定

□ 白樺文学館の展示と講演会
展示「式場隆三郎展ー見えない世界の美しさに心をよせてー」

期間　①7月15日～10月9日
　②10月17日～令和6年1月14日～
場所　白樺文学館

講演会「式場隆三郎先生がご支援くださった日本点字図書館とは」

日時　9月30日(土)14時～15時30分
講師　長岡英司さん(日本点字図書館理事長)
参加費　無料、先着100名

トークイベント「式場隆三郎について ー白樺・民藝・医療・福祉ー」

日時　10月29日(日)14時～
講師　山田真理子(式場病院)
　伊藤宣真(日本点字図書館)
　稲村隆(白樺文学館)
会場　講演会・トークイベント両方ともアビスタホール

編集後記　今回の会報は初めて16ページとなった。どの記事も次号にという訳にはいかないもので、全部読み終わるのにいつもより時間がかかりますが、ご容赦ください▼今年の夏はとにかく暑かった。記録ずくめの8月だったと言える。まずこの夏の日本の平均気温の基準値からの差はプラス1．78度(途中記録となり、夏の気温としては統計を開始した1898年以降の126年間で最も高かった。東京都心ではひと月の全ての日が30度以上の真夏日となったことになり、気象庁の1875年の観測開始以来、初めてのこと。又、東京都心では猛暑日(35度以上)の日数も、過去最多を更新した▼「あつい」といえば夏の甲子園も熱かった。連日の猛暑の中で全国の広く、厚いファン層に支えられ、高校生が熱い戦いを続けた▼記録としては、慶応高校の107年ぶりの優勝は新記録だ。慶応高校は髪形が話題になったが、他校と一線を画した自由を重んじる伸び伸び野球は「エンジョイ・ベースボール」の名で広まった。選手から篤い信頼を得ていた監督の手腕もマスコミで大きく取り上げられた。(美崎)